



■ フォト・エッセイ ■

淮河「生態災難」の村々に焦点をあわせて

写真

霍岱珊

Huo Daishan

霍敏杰

Huo Minjie

文

霍岱珊

Huo Daishan

2004 年は淮河流域水汚染処理対策の 10 年目であった。しかし、黒く臭い淮河の水から沸き上がる泡（あぶく）は一目で怖気つかせ、そして世に向けて「淮河の水汚染を 10 年で処理することは夢にすぎなかった」と宣告する（2004 年 1 月撮影）

かつて淮河にはたくさんさんの民謡があった。
「千万見てまわっても、淮河兩岸には及ばない……」

「淮河が豊作になれば、天下も満ち足りる……」

「大河は湾曲し、長くまた長く、一年で收穫した穀物は山のように……」

一九九〇年代に入り、一曲の新しい民謡が淮河流域で広く伝えられている。

一九五〇年代、米をとぎ、野菜を洗い

一九六〇年代、洗濯をし、灌漑をひき

一九七〇年代、水質が悪化し

一九八〇年代、魚や蝦が絶滅して

一九九〇年代、下痢になり、癌が発生

ここで生活している人々はみな、まさに一種の試練——ある種の生存極限の試練を受けている。最も人類の居住に相応しい場所が、水汚染のために最も人類の居住に相応しくない場所になってしまった。多くの人が水汚染によって癌になったと私に泣きながら訴える。私はこうした「癌の村」の追跡調査を長期にわたり行ってきた。

一九九九年秋、私は淮河の岸边にある趙古台村の手押しポンプ式井戸を撮影していた。そこで何名かの中年婦人に話しかければ、これは水汚染の人への健康影響を研究するためだと答えた。私が言い終わらないうちに、そのなかの三名の婦人は忽ち顔色を変え、目から涙があふれだし、袖で顔を隠して、涙を拭きながら立ち去った。いぶかる私は、彼女たちの夫はみな癌で亡くな



「花々の汚染への抵抗」 淮河の水汚染は猛烈な耐え難い臭気を発し、河岸の学校の子ども達はマスクとサングラスをして授業を受けざるをえない (1999 年撮影)



化学調味料、製紙、皮革、化学工業品などを生産する上流の企業が排出する污水がここで発酵、蒸発、濃縮し、臭気を発散させる。表面に浮かぶ泡沫は様々な色や形を呈し、まさに「千変万化」の壮観である (1998 年撮影)



船頭の王氏は数十年間ものあいだ沙潁河（淮河最大の支流）で渡し船をしていた。沙潁河が汚染されてから、王氏の眼は河の水で燻されてほとんど失明した。1997 年、とうとう彼は渡し船の人生をあきらめざるをえなかった (1995 年撮影)

り、そのうち一人は亡くなってまだ百日も経たない、ということを知られた。私は胸が痛み、うしろめたい気持ちでいっぱいになった。村の幹部である王国民はこう語った。「我が村は河から百メートルも離れておらず、すでに癌で五七人が亡くなった。びんぴんしていた若い者が、癌になると持ちこたえられずすぐに死んでしまった。我が村の水はもう飲めない。みな毎日遠くまで水を探しに行っている。淮河がこんな近くにあるのに、飲む水がないなんて！」

この村で私は沈丘県槐店鎮中学に通学する一人の女の子に出会った。彼女は、水汚染の臭気を防ぐため、同級生はマスクをして授業をうけている、と教えてくれた。

当日午後、私はその学校に行ってみた。教室に入って、たちまち目の前の情景に唖然とした。まるで細菌実験室に入ったかのようである。私は子どもたちに向かってシャッターを押し続けた。これら一連の写真に「花々の汚染への抵抗」と名付けた。

学校で写真撮影を終えたのち、沈丘槐店大堰に急いで行き、河の臭いを近くでかいでみたいと思った。汚染で黒い河の水のなかにたくさん魚が死んで腐乱し、悪臭を放っているところを、息を止めて、三脚を立てて写真を撮ろうとした。そのとき、目が腫れてうずき始め、頭もどんどん膨張して、周りがみな大きくなっているような感覚に陥り、足もふにゃふにゃになった。怖い！逃げなくては。河辺の臭いはちよう



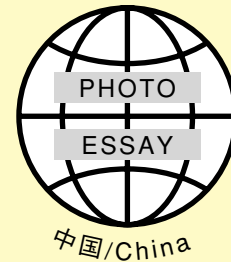
東孫楼村に黒くて臭い汚染水が引かれ、村民は大きな被害を受けている。王氏は上着を脱いで見せた。「父も、母も、兄も、弟も、みんなここ数年、食道癌で死んだんだ。俺も胃を切ったよ。次に死ぬのは俺さ！」(2004年撮影)



「死と隣り合わせ」極度に汚染された淮河の水は工業用にも、農業用にも、ましてや飲用にも使えない。硫化水素ガスをまき散らす、いわゆる「死んだ水」であり、人々は水の事となると顔色を変え、遠くに逃げる。ここに身を置くものは、生存極限の試練を受けているのである(1999年撮影)



「1997年工場排水基準達成」とはいえ、依然淮河は汚染されたままで、死魚が岸辺に「死亡線」を描いていた(1997年12月撮影)



ど私が兵隊で訓練を受けていたときにかいだガス爆弾が爆発したときに出る硫化水素ガスのようだった。そこでガスマスクを探しあて、二日目、仲間を連れてまたやってきて、マスクをつけて写真を撮った。撮影が終わっても、臭いをかいだ時の嫌悪感をぬぐい去ることはできなかった。私たちにも命の危険があったことから、一連の写真に「死と隣り合わせ」と名付けた。

死と隣り合わせの人は実に多い。最も心を痛めるのは、「癌の村」である。黄孟營は私が最初に見つけ、最も注目している「癌の村」である。黄孟營村には一六の溜め池があり、黒く汚れた悪臭を放つ淮河の水を、幹線用水路を通して溜め池に引いている。ある一家は溜め池の傍に住み、最も早くから汚れた水を飲み、また汚れた溜め池の水で毒死した魚をよく食べた。ついに一家四人が三年のうちに癌で亡くなった。村人はこの家を「絶戸」と呼んでいる。

いつも黄孟營村に入るたびに、気持ちは重く、このような現実立ち向かう勇氣はない。前の調査で知り合った癌患者はすでに亡くなっており、現在また新たに癌患者が重病で床に就いて、彼らはあきらめ、また哀願するような目で私を見上げる。以前このような目を見たとき、私は彼らを慰め、助けてあげると答えた。しかしできなかった。そのため、彼らが絶望のなか突然生を求めて目を光らせるのを見るのが怖い。村で何名かの癌患者を訪問して、そのうち疲



淮河の水汚染のために、河のそばにある趙古台村では1998年に癌ですでに57人が死んだ。淮河のほとりにいながら水を飲めないことは、子ども達の心に影を落とした(1998年撮影)



淮河の汚染は多くの「癌の村」を造り出しただけでなく、これら村の若い夫婦は不妊症となった。なかには幸いにも子どもを生んだ夫婦もいるが、この子ども達は不幸にも先天性の疾病や知的障害を持って生まれ、奇形児も珍しくない(1999年撮影)



黄孟営村の51歳の張女史は末期食道癌を患った。彼女はきれいな水を一口飲みたくても、もう飲み込むことができず、ただ絶望して自分の村を見上げるしかなかった(2001年撮影)

れて歩けなくなった。あきらめることができ
ない。泣きたいが、泣けず、ただ耐える
しかない。家に帰って彼らを撮った写真を
整理しているとき、抑えきれなくなつて、
涙が止まらなくなった。このような災難を
経験したことはない。しかし、目の前の
「生態災難」は、現地でこれまで起こった
いかなる時期の災難をも越えており、戦争、
伝染病、飢饉すべて比べものにならない。
たったひとつの小さな村、黄孟営村で、近
年すでに一六名の村民が癌で亡くなり、
八四%の村民が毎年下痢を起こし、多くの
妊娠適齢期の夫婦が不妊症となり、ある婦
人は子どもを生んだものの、健康ではない。
三五名の児童が先天性の疾病、知的障害、
奇形に侵されている。その後数年の調査で
わかったことは、黄孟営のような村は少な
くとも一〇〇はあるということだ。
私にはひとつの願いがある。できるだけ
早く淮河流域の生態環境破壊の現実を変え
たい。二〇〇三年、私たちは民間環境保護
組織、「淮河衛土」を設立し、「淮河を救う
希望工程」を実施している。私たちは民間
の基金から三五〇セットの飲料水濾過装置
と九〇万円相当の薬の寄付を受け、癌の村
にて、三五〇戸と二〇〇名余りの患者に救
助を行っている。焼け石に水ではあるがそ
れはすでに始まっている…。

(フォ・タイシャン／写真家・淮河衛土
代表、翻訳＝大塚健司)

<http://www.hwsw.com/hwsw/>